

「ダウン症」概念をめぐる「ループ効果」の検討

「変容するくまなざし」プロジェクトを事例として

○東京大学 渡部麻衣子

1 目的

本報告の目的は、ハッキングが「ループ効果」と呼ぶ現象を、「ダウン症」概念において確認することである。「ループ効果」は、人の分類が、分類された人の内実を変容することによって分類そのものを変容させていくことを指す概念である。ここでは発表者が関わった写真プロジェクトを通して、この効果が「ダウン症」という分類概念においても生じていることを確認する。ダウン症は出生前検査の最も一般的な対象となっている。この分類に「ループ効果」が生じていることを示すことで、この現状の正当性を社会的に論じる一助となることを期待している。

2 方法

事例として写真プロジェクトShifting Perspectives(「変容するくまなざし」)をとりあげる。「変容するくまなざし」は、2005年から2014年まで、英国ダウン症協会の主催でダウン症のある子を持つ英国の写真家等が中心となって行われた写真による表象プロジェクトである。毎年新規の参加者を募ってロンドンで企画展が開催された他、世界各地でプロジェクトを紹介するパネル展示や企画展が開催された。発表者は日本において2013年に大阪で行われたパネル展示、2014年に東京で行われた企画展の開催に協力した。本発表では特に2014年に東京で行われた企画展をとり上げ、そこで発表された8名の作家による11作品の内実を分析し、それらと「ダウン症」概念との関係性を考察する。

3 結果

作品の形体は、肖像写真、私的写真、絵画写真に分類され、主題には「子ども」、「母子関係」、「若者」、「家族」、「障がいの告知」が含まれる。作家の1人が「私たちは純粋な観察者ではありません。私たちは、まさに主体なのです」と述べるように、それぞれの作品は、ダウン症のある人の家族として作家が形成してきた「新しい親族像 new kinship imaginary」を反映している。そこには、「ダウン症」という分類概念が可能とする「ダウン症の経験」によって形成される「ダウン症」についての「新しいイメージ」が、「現代ではもはや適切ではない」イメージに対するアンチテーゼとして表象されている。ここに、親密圏に生じる「ループ効果」と、それが公共圏における「ループ効果」を志向して共有される現象を確認することができる。

4 結論

「変容するくまなざし」には、「ダウン症」という分類が「ダウン症」と診断される人の経験を可能とし、そのことによって「ダウン症」の内実を変容していくダイナミックな過程が表象されている。「ループ効果」に依拠すれば、その過程の先には「ダウン症」という分類そのものの変容を予測することができるだろう。

謝辞: 本報告は特別研究員奨励費23-10783の助成を受けた研究の成果の一部です。日本での企画展開催を実現して下さった公益財団法人日本ダウン症協会の関係者の皆様、また企画監修者であるRichard Bailey氏をはじめとする作家諸氏、グレートブリテンササカワ財団に篤く御礼申し上げます。

文献:

Hacking, I. 1986, Making Up People, T. Heller et al. (ed.), *Reconstructing Individualism*, Stanford Univ. Press: 222-36.

Rapp, R. • Ginsburg, F., 2011, Reverberations: Disability and the new kinship imaginary, *Anthropological Quarterly* 34(2): 379-410.